



★歌のメモリー 回想五十首選
「仙波龍英」

選・文 藤原龍一郎 (「短歌人」編集人)

Ryūichi Fujiwara

七曜に忌のなき日なし 蔦漆それゆるゑこの身を狂へいざなへ
『わたしは可愛い三月兔』

悪食をきはめつくして泣くひとはつひに 献血を趣味となすべし

地球儀を燃やす夕べに 太陽系惑星しづかに連なりゆかむ

ムルギーのカレーすすれば 新東宝「お玉が池」のゆふひはあかく

夕照はしづかに展くこの谷の PARCO 三基を墓碑となすまで

火地獄より 帰途の初秋つひに 燃えつきてしまひしわれのそれから

北千束ゆきかふひとの影うすく エクトプラズム 肛門から曳き

蝸牛蝸牛きみ 獣類の汗ながすことありや*** F.U.C.K.I

Summer rain 過ぎりし のちのみどりより 両眼暗き 鱗翅目 発つ

Coke 飲む朝に まばゆき光あれ Cook 朽ちゆくまでの 熱あれ

浴槽を水で 満たしてゆく 裸体むらさきだつ 目をみづから 選ばず

肌寒き 白昼わたくしきは まりて 「バン・バン・バン」と 口で 樹を 撃つ

あるときは 渋谷のそして あるときは 田園調布の 憂鬱耀ふ

ナボコフの 趣味をにほはせ 桜木は 夜ごと 淫靡に ふうらみゆきぬ

『せんはりゆうえい』一九五二年
三月三十日東京生まれ。一九七四年「短歌人」入会。固有名詞を大胆に取り入れた作で評価を得る。二〇〇〇年四月十日逝去。歌集『わたしは可愛い三月兔』『墓地裏の花屋』仙波龍英歌集。

やや飢えて四月のあしたなまたまご飲めばわたしは三月兔

桃、桜、木蓮、杏子、沈丁花いつせいに咲く、冗談だらう

愛は彩雲 さみしいだけや神楽月あかんあかんと言うたやないか

菊月は寒いさかいにバシユラルその水をわしゃよう飲まんねん

あほつ。愛ちうあれかて火地獄には仰山あるんやさかい苦しめ

蟹二匹鍋に入れつつ「これレノン、これ由紀夫」と前生判ず

あの蟹は亡父の転生ののちなるや気づくあしたに五月雨がふる

強姦の趣味などはなし午後三時たらこひとつを箸でころがす

かたはらのをんなは頬を体液で濡らすこれさへひとつ技巧の

わたくしを憎むをんなのくちびるにこの罪と恥ほのかに光る

うつしみを蕎麦の羽織の蕎麦でしかなしと決めてはトマトジュース飲む

かなしくてやりきれなくてたまらなく虎のマスクがリングに踊る

海なりのアックスボンバー、ラリアート総身にうけて海星はねむる

熱帯夜バケツの底にのこりたるみづ中空をひたこがれるむ

倭の都市を雨ふりしきりさむざむと代々木にうねる裸の吊り屋根

白髪のフライドチキンのをぢさんに「米帝かへれ！」と叫ぶ如月

ひら仮名は凄じきかなははははははははははははは母死んだ

窓硝子すべて激しく共鳴す桜の蕾ひらきゆくとき

『墓地裏の花屋』

予見する歌人

仙波龍英の短歌の価値は、その鋭い予見性にある。

夕照はしづかに展くこの谷の PARCO三基を墓碑となすまで

代表作として現在でもしばしば引用されるこの一首が詠まれたのは一九八〇年代の前半であり、時代の風俗は、まさにバブルへ突進していくさなかであった。PARCOという記号は、消費文化のシンボルとして、日夜、テレビからコマーシャルメッセージを発して、洗練されたコピーと映像は時代の先端を創造しているかのように確かに見えた。

その渦中で仙波龍英がこのような冷めた視点で未来を、つまりは現在を詠いとめていたことに感嘆を禁じえない。真の詩人の血を身に受けた表現者は、過去をも未来をも幻視して、それを予見的な言葉に結晶させる。そんな箴言が身に染みる。

仙波龍英の表面的な特徴の一つに、サブカルチャー的な事象や用語を短歌に貪欲にとり入れたことがある。これは上掲の五十首を読んでもらえば気づくだろう。ただ、気づい

三月はひと笑ふ月花ひらき四月の祖国の死者を待つ月

夜、祖国をゆゑなく愛しこの脚が洗足池へとむかひはじめ

さて、黄昏をすぎて神神おりたちてのちに死にたる桜木の下

S O L E N もたちまちにして消えうせし夜をかけ桜を揺さぶる、嵐

夜桜の彼方もやはり夜なりき「彼方はいつもうつくしきもの」

まる焼きの、かんぺきにまでまる焼きの母はいまだに母であらうか

仏壇の奥ゆ十指がなにか掴まんとして果たさずに消え

たまらなく百まで生きたき朝なりき殺意が尖るほどまでひたすら

唐突にワープ画面いつばいを三島由紀夫の首が占拠す

愛しあふ夜もあるらむ墓地裏の花屋の主人とその娘と

終焉はまづ墓地裏の花屋からガモフの宇宙、ホーキンスの脚へ

水をうつ、墓地裏の花屋つつみたる残暑は貌をもつてゐるのだ

ぴあmap小指で辿る古址名所旧跡ホテルニュージャパン跡

夢枕にいきなり人が佇ちたれば「失礼な！」などと叫んでしまふ

ハムサンド片手に開く「フォーカス」が 静かに！ いま血が流れてゐる

われといふ時計は疾うに停止して「なぜにおまへは生きてゐるのだ？」

つぎつぎと少女降る街歩みゆき脳裡にやさしく鱗をよぎらす
へあの街この街をんな降る街、東京音頭。
近頃ますます病んでゐるやうだ。
 歌集未収録作品「花のイメージ」

恵理、さゆり、まみ、理沙、芳恵、知美らの傘いつせいに開く。おお薔薇！
さうび

てほしいのは、それは単に珍奇な風俗を詠もうということではなく、時代との軋みを生じるように詠われているということである。時代と軋む事象に敏感であることは、その短歌作品を、時代と拮抗する文学としての屹立を図ろうとする自恃である。

仙波龍英の第一歌集『わたしは可愛い三月兔』は、一九八五年五月に紫陽社から刊行された。吾妻ひでおによるコミック的なイラストをつかったのも、版元を歌集プロパリーのそれではなく、詩人の荒川洋治氏のプライベートプレスであった紫陽社を選んだのも、既成の歌壇的しがらみから無縁であったからなのだろう。この選択は正しく、仙波龍英の短歌は、忘れられることなく、現在も心ある読者たちに記憶され、語り継がれている。

仙波龍英以降、サブカルチャー用語は現代短歌の通貨となったが、その現状が、仙波の目指した文学的屹立とはかけ離れていることは、この時代の衰弱にちがいない。

●「自選五十首」は平成25年度4月号より掲載いたします。